庄内藩大工棟梁小林家旧蔵 の慶長期以前の木割書に見 られる鳥居について

A REPORT ON THE KIWARI-SYSTEMS OF TORII IN THE ARCHITECTURAL MANUAL BOOKS WRITTEN BEFORE THE KEICHO PERIOD

永井康雄 ——— *1
飯淵康一 ——— *2

Yasuo NAGAI
Kouichi IIBUCHI

This report presents the kiwari-systems in the architectural manual books that were written before the early part of the 17th century. Those old records were handed down to the recent years by the KOBAYASHIS who were inaugurated as the DAIKUTORYO that was the post for the authorized carpenters in SYONAI-HAN. Their descriptions were about the architectural techniques to all kinds of architectures and the architectural formalities, so they were important to study Japanese Middle Ages architectures. Among those architectural techniques, this report presents especially the kiwari-systems of TORII that is the gate of a shinto shrine.

キーワード：
木割書，慶長期以前，鳥居，木割

Keywords：
Architectural manual book, Before the keicho period, Torii, Kiwari-system

序

現在、江戸期の木割書については、明暦元年(1655)の「新編雛形」(武品豊嶋郡江府瀬河政重撰)を嚆矢とする多種多数の木版本や、江戸幕府の大棟梁平内家を始めとする各大工家の家伝書類など多数知られている¹⁾。しかしながら慶長期以前の木割書となると、『明治前日本建築技術史』²⁾の中で概要が記されている「大工斗墨曲尺之次第」、江戸時代前期の編纂とされる「愚子見記」に収録されている「三代巻」³⁾の他、「木碎之注文(寿彭覧書)」⁴⁾、「孫七覧書」⁵⁾、「今福彦兵衛伝来目録」⁶⁾、「古河新兵衛覧書」⁷⁾などの存在が知られるのみである。これら近世初頭以前の木割書は、中世から近世への建築技術の変遷過程を解明する上で近年増々その重要性が高まってきている。これらに記される木割方法を明らかにすることは、現存する中世の建築遺構の設計手法を解析するためにも重要であろう。

前の報告⁸⁾では、鶴岡市郷土資料館に所蔵されている庄内藩の大工棟梁職を代々勤めた小林家⁹⁾旧蔵史料の中から新たに発見した慶長期以前の木割書類の概要を紹介するとともに、それらに記される木割方法の内、社寺建築において重要な構成要素の一つである斗栱に関する技法についての報告を行った。本報告では引き続き、それらの史料に記される建物の内、構成部材が少なく、全体の木割手法が把握しやすい鳥居に関しての報告を行いたい。鳥居に関する記述

は、以下の3史料に収録されている。

史料1(前報告の表1¹⁰⁾のNo.9)

表題: なし(仮題: 堂宮数寄座敷其外諸木碎) / 形式: 卷子形式 / 寸法: 縦175×横2845mm / 奥書: 十二月廿四日

史料2(同No.15)

表題: 門之もくろく / 形式: 冊子形式 / 寸法: 縦250×横174mm / 奥書: 慶長十九年甲寅霜月十八日 小沢若狭守光祐(花押)

史料3(同No.25)

表題: なし(仮題: 諸木碎) / 形式: 冊子形式 / 寸法: 縦224×横167mm / 奥書: 慶長廿年十月十一日 小沢若狭守光祐(花押)

以下に各史料における木割方法について述べることにするが、原文引用中の番号及び下線は筆者の注記である。なお、後掲する筆者作成の図中の番号はそれぞれの原文引用中の番号と一致している。

1 「(堂宮数寄座敷其外諸木碎)・とり井」(史料1)

史料1には全部で9項目の木割が記されている。鳥居の木割は3番目に収録されているが、独立した項目名を付けずに前項の「三けんやしろ」の記述の後に続けて書き始められる。関係する記述の全文は以下の通りである(写真1参照)。

「(1)一とり井のはしら一尺二寸 (2)まも一上二尺 (3)うつりハしまきの下

*1 東北大学工学部建築学科 助手・工修
(〒980-77 仙台市青葉区荒巻字青葉)
*2 東北大学工学部建築学科 助教授・工博

*1 Research Assoc., Dept., of Architecture, Faculty of Engineering,
Tohoku Univ., M. Eng.
*2 Assoc., Prof., Dept., of Architecture, Faculty of Engineering,
Tohoku Univ., Dr. Eng.

はまで一上二尺 (4)はしらのはんかくのひとめんつ、西江ふためんひろけるなり (5)はしらまるくしてその内ヲ四ほうニしてぬき之だけニする (6)はしらヲ三ツツニぬきのあつさヲする (7)しまきもぬきのあつさと同しまきも三ツツニする (8)たけハはしらとおなし (9)かさき下はハかさぎのたけ程たすなり (10)角へきのなかさはしらのたけ程成

(1)(2)(3)の記述では、柱径・「ま」(柱間)・「うつり」(内法)を実寸で指定しているが、(1)(2)から柱径は「ま」(柱間)の寸数(10/100)の割合になっていることが知られる。

(3)は「うつり」(内法)高さに関する記述である。その指定位置となっている「しまき」の比例値は(7)(8)に記されているが、これと現在島木と呼ばれる部位の比例値とを比べると、厚さは薄く(通常は柱径の3/5)、丈は高すぎ(通常は柱径の3/5)、比例値としては現在額束と呼ばれる部位に相当する。しかも近世初頭以前では現在の「額束」は「島木」と呼ばれていたこと¹¹⁾からも、当史料の「しまき」も現在の額束のことと考えられる。従って、内法高さは「しまき」<額束>下端、即ち貫の上端までと解釈される。

(4)は柱の転び具合とそれによって決まる柱間に関する記述である。「はんかくのひとめん」は「八角の一面」のことと考えられるので¹²⁾、柱の転びはいわゆる「ハツ中転び」である。柱の転び具合によって決まる柱間は、「ひろける」(広げる)と表現していることから柱脚部

における柱間ということになる。従って基準となる柱間はそれより上部にある¹³⁾ことになるが、それは「うつり」(内法)高さの指定位置となっている「しまき」<額束>の下端での柱間が考えられよう。

(9)は「かさき」<笠木>の出に関する記述であるが、「かさき」<笠木>の丈や何処からの出なのかは規定されていない。明神鳥居系の場合、最上部に架けられる横木は上部の笠木と下部の島木とから成るが、一般的にはそれぞれの丈は柱径の2/5・3/5程度である。当史料においても「かさき」<笠木>の丈を柱径の2/5程度と考えれば、その下端の出具合から(9)の記述は島木先端からの「かさき」<笠木>の出を規定していると解釈することができる。

(10)の「角へき」とは端部における「へぎ」(削り取り)のことと考えられる。削り取ることによって定まる形状としては、「反り」が考えられよう。それを柱間中央部の島木下端から島木の先端部下端までの反りと解釈すると柱径程も反り上がるのでは反りが強すぎる。従って反りの量から考えて、柱間中央部の島木下端から「かさき」<笠木>先端部下端までの反りと解釈することが出来よう。

当史料には、貫・島木の長さ、笠木・島木の丈、「しまき」<額束>の幅などを規定する記述を欠いており、記される鳥居の全体像は不明であるが、以上の検討を基に纏めたのが図1及び図2である。

写真1 「(堂宮数寄座敷其外諸木碎)とり井」(史料1)

図1 「(堂宮数寄座敷其外諸木碎)・とり井」(史料1)の木割

図2 「(堂宮数寄座敷其外諸木碎)・とり井」(史料1)の試作図

2 「門之もくろく・とりいの事」(史料2)

史料2には全部で11項目の木割が記されている。鳥居の木割は11番目、即ち最後に収録されている。関係する記述の全文は以下の通りである(写真2参照)。

「一とりいの事 (1)一柱のふとさわ間にて一寸一分かそへ (2)たかさ大貫の上と石の口まで柱貫の二て上の柱の中すミを取て同かやし也 (3)一柱のふんはり柱半分ツゝふんはる也 (4)一かさ木と大貫とのあひハちま木の所にて柱一本おく也 (5)一かさきのたかさ柱一本 (6)たかさを五ツにわけて三ツかさ木 (7)三ツわきの見 (8)たりミわ柱のかねとろく水とのあひのかねほと二てたるむ也 (9)一はなのそりハ下ハバきのミ半分そる也 (10)又中の木のミの上をはなへとしてはなにてのきのミの中すミかする也 (11)一木のミのうわばのすくすミはなにて柱一本あけてかさ木のたかさ二する也 (12)一わくさのは、柱のうらのめかやし二して一分のいかりある也 (13)一ちま木貫のあなをよりたる所にて柱のへりかわほとをちま木のは、二する也 (14)一ちま木のほぞハ貫二ほばをのこしてはなして吉貫にあなをより候へハそれ水入候てくさり申す如此之 (15)貫のはなの長さ貫の上にて柱の中すミうちにて三ツにわけて又一ツを柱の中すミ貫のはなまであつる也 (16)又木のミのはなの長さも貫と同 (17)かさ木のはなのいてやうわ貫の上にて柱のあしものとそきにきるへし (18)大貫のたけわ七分かそへ (19)下三分かそへ (20)わき柱のふとさわ七分かそへ (21)たかさは大貫の下石の口とわけてわきとりいのかミの貫の上二あつる也 (22)貫の上きほうしの長さわき柱二本半分也 (23)但二本ハわきとりいの上下の二本の貫ハ五分かそへ (24)下の貫のたかさハ下大柱一本貫の下まで石の口 (25)わきとりいのひろさわそとのおぜを大とりいのうちのりへうへにておしまわす也」

当史料に記される鳥居は、「大とりい」に「わきとりい」(上下2本の貫と控柱から成る)を附属させた四脚鳥居の形式である。

(3)に「柱のふんはり」(柱の踏ん張り)とあることから柱の転び具合によって決定されるのは柱脚部での柱間であると考えられるので、基準柱間はそれより上部にあることになる。その位置としては、(2)で高さ、(15)で貫の長さを決める際の基準位置となっている貫の上端が考えられる。

(4)から(11)までと(16)及び(17)の記述は、「かさ木」と「木のミ」に関するものである。(5)(6)から「かさ木」は現在の笠木のみを指す場合と笠木・島木全体を指す場合があること、(7)から「木のミ」は現在の島木に相当するものであることが判る。「木のミ」<島木>の形状は、(8)と(9)で柱間内での下端の弛みと柱間外での下端の反りを定め、(10)で中央部上端と端部の丈中墨との関係を定めることによって決めている¹⁴⁾。「かさ木」<笠木>の形状は(11)と(17)で端部での高さ(丈)と出(長さ)を規定することによって決めているが、(17)はいわゆる「禪墨」と呼ばれる方法である。

(4)と(13)(14)の記述は、「ちま木」に関するものである。「ちま木」は「志ま木」の誤写と思われるが、これは今日の「額束」のことである。(13)で「ちま木」<額束>の幅を柱にあげた貫穴の「へりかわ」によって決めている。この「へりかわ」は、「新撰拾遺大工規矩尺集」(元禄13年(1700))に「志ま木乃廣サハ大柱に大貫乃穴をよりて其両乃口脇をとりて志ま木乃廣サにするなり但シ志ま木共申額つか共申も乃なり」とある「口脇」に相当するものと思われる。

(12)に記される「わくさ」については、「わらさ(薬座)」の誤写なのか或いは実際に「わくさ」という語が存在していたのかは明らかでないが、後掲の史料3の(16)と(31)の記述の中に「わらた」「わくた」(これも正しい表記か不明)という同様の部材名が見られる。後述のように史料3と「孫七覚書」とはほぼ同一の木割内容であるが、「孫七覚書」で用いられる「ワラサ」(或いは「ワラタ」)は現在の台輪に相当するも

のであることが明らかにされている⁵⁾。当史料には「わくさ」の厚さに関する記述はないが、「いかり」が有ることからここでは一応現在の台輪のここと解釈しておく。

(20)以下は「わきとりい」に関する記述である。(21)(24)で2本の貫の高さ(位置)を定め、(25)で「そとのおぜ」(控柱の外法)と「大とりいのうちのり」(大鳥居の内法)とを等しくすることによって控柱の柱間を決めている¹⁵⁾。

以上の検討を基に纏めたのが図3及び図4である。。

3 「(諸木碎)・とりいの事」(史料3)

史料3には全部で37項目の木割が記されている。鳥居の木割は12番目に収録されている。関係する記述の全文は以下の通りである(写真3参照)。

「一とりいの事 (1)はしらハ一寸二分かそへ (2)かさ木の上はもはしら一本 (3)木のミの下ハ上を五ツにわけて三ツなり (4)木のミのいかりハ一尺に一寸ツゝいかるなり (5)かさ木の上ハより一寸ツゝすふるなり (6)木ミのはなのき一分のそきなり (7)かさ木のはなハかさ木のあつさほと出なり (8)かさ木のたけハはなどはしらところとのあいにてはしら一本こすへし (9)かさ木のなかさハ木のミにて五ツわけなり (10)そりハかさ木ほとはるなり (11)木のミのましハ一尺に四分ツゝなり (12)かさ木のましハ一尺に六分ツゝ也 (13)上のぬきハたけ六分かそへすこしふとくするなり (14)あつさハ三分かそへ (15)なかさハ木のミほとなり (16)わらたのあつさハかさ木の上まいほと也 (17)ひろさハはしら四分一出候へくなり (18)上のはかりハ一分はかりなり (19)しま木のひろさはしらのぬきをゑりてのどころ也 しぬきハこゝまたうツすなり (20)こしぬきは五分かそへ (21)あつさハ三分かそへ (22)小はしらハ七分かそへ (23)ぬきハくひるなり (24)きほうしのなかさハぬきの上より二本なり (25)こはしらのまハかやうおし入なり (26)たかさハ大ぬきの下にて中すミ同かやしなり (27)中ぬきのたかさハ大ぬきの下より中ぬきの上はを又ぬき一ツさけて入なり (28)大はしらハ八ツなかすミほとはたかるなり (29)こはしらハすくとのあいほとはたかるなり (30)かさ木と大ぬきのあいハはしら一本 (31)かさ木のま内のたワミハわくたをはしらにかねのてにおきあいたるやうにすへし」

当史料に収録されている項目と「孫七覚書」のもの¹⁶⁾とを比較すると、記載順序は異なるものの、全体としては良く一致している。特に「孫七覚書」の鳥居に関しては、その全文が紹介されている¹⁷⁾が、当史料の記述文はこれとほぼ一致している。「孫七覚書」と「大工斗墨曲尺之次第」とに共通する内容を持つ技術書が桃山期に幾つも存在していたと言われているが⁵⁾、当史料もそれらの一つを写したものと推されよう¹⁸⁾。しかしながら、当史料と「孫七覚書」の鳥居の記述とは、細部において相違する箇所が散見されるので、それらの箇所について既往の研究を参考にしながら当史料の木割内容を明らかにし、史料の価値を考える手始めとしたい。

(2)から(5)までは「かさ木」<笠木>と「木のみ」<島木>の断面形状、(6)から(12)までと(31)はそれらの正面から見た形状に関する記述である。(6)(7)の部分は、「孫七覚書」では「木ノミノハナノソキ下ノカサ木ノハナハカサ木ノアツサホトイツル也」、「大工斗墨曲尺之次第」では「きのみはなのとき 一分のそき 笠木鼻 笠木の厚さ程出す」となっている。「孫七覚書」には「一分のそき」という記述がないため、「孫七覚書」の「木ノミノハナノソキ」は、「木ノミ」<島木>の鼻先からの「カサ木」<笠木>の出との解釈がなされた¹⁷⁾。しかしながら当史料には「大工斗墨曲尺之次第」と同様の記述があるので、「孫七覚書」においてこの部分が脱落したものと考えられよう。当史料では、(7)で「木のみ」<島木>先端からの「かさ木」<笠木>の出を規定している

柱間[大貫の上端] ———

柱太さ $\times 11/100$

柱の踏張 $\times 1/2$

柱の矩と陸木との間の矩程 (島木) の弛み $\times 1$

かさ木 (島木) 下端と大貫上端との間[ちま木 (額束) の所にて] $\times 1$

かさ木 (笠木と島木全体) の丈 $\times 2/5$ かさ木 (笠木) の丈 $\times 3/5$ 木のミ (島木) の丈 $\times 1/2$ 木のミ (島木) 鼻の反り

かさ木 (笠木) 鼻の高さ[木のミ (島木) 上端より] $\times \sqrt{2}$ わくさ (台輪) の幅 1分 わくさ (台輪) のいかり

大貫の丈 $\times 7/10$

大貫の幅 $\times 3/10$

脇注の太さ $\times 2.5$ 擬宝珠の長さ[脇島居上貫の上端より] $\times 7/10$

脇島居の上下の二本の貫の丈 $\times 5/10$

脇島居の下貫の下端の高さ[石の口まで] $\times 1$

大貫下端の高さ

柱のへりかわ $\times 1$ ちま木 (額束) の幅 $\times 1$ 脇島居の外のおげ(外法)

大島居の内法 $\times 1$

高さ[大貫上端から石の口まで] $\times 1/3$ 大貫の長さ[柱の中屋より大貫の鼻まで] $\times 1$ 木のミ (島木) の鼻の長さ

大貫の上にて柱の足下覗き かさ木 (笠木) 鼻の出

* 中の木のミ (島木) の上をはなへとしてはなにてのきのミ (島木) の中すミかする也

* ちま木 (額束) のほぞハ貫二ほばをのこしていたして吉貫にあなをより候へハそれ入候てくさり申す如此之

This technical drawing illustrates a mechanical assembly, likely a pump or a similar fluid-handling device, shown in a cross-sectional view. The assembly is composed of several key components and features, labeled with numbers in parentheses:

- (1)**: A central vertical shaft or piston rod.
- (2)**: A large, curved, bowl-shaped component at the top, possibly a pump head or a collection chamber.
- (3)**: A small circular component at the base of the shaft, likely a seal or a bearing.
- (4)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (5)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (6)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (7)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (8)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (9)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (10)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (11)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (12)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (13)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (14)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (15)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (16)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (17)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (18)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (19)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (20)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (21)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (22)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (23)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (24)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.
- (25)**: A small circular component on the shaft, possibly a valve or a seal.

The drawing also includes several dimension lines and arrows indicating specific measurements and directions:

- (2)**: A dimension line indicating the overall height or length of the assembly.
- (3)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the base.
- (4)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (5)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (6)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (7)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (8)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (9)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (10)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (11)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (12)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (13)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (14)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (15)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (16)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (17)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (18)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (19)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (20)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (21)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (22)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (23)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (24)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.
- (25)**: A dimension line indicating the diameter of the shaft at the top.

NII-Electronic Library Service

写真3 「(諸木碎)・とりいの事」(史料3)

図5 「(諸木碎)・とりいの事」(史料3)の木割

図6 「(諸木碎)・とりいの事」(史料3)の試作図 但し、この鳥居は控柱を有する形式であるが、控柱の柱間や貫の位置が不明なので、これらは省略する。

ので、(6)は「木のみ」<島木>先端の「除き」(或いは「削ぎ」)方の指示、つまり先端の形状を指示しているものと考えられる。

(9)(10)の部分は、「孫七覚書」では「カサ木ノナカサハ木ノミミテ五ツワリハカサ木トワルナリ」(下線は筆者の注記)、「大工斗墨曲尺之次第」では「笠木の長 木のみにて五つ分け鼻先程反る」となっている。(9)の記述は「木のみ」<島木>の長さをいわゆる「五間割」¹⁹⁾で求め、(7)と併せて「かさ木」<笠木>の長さを定めるという内容であるが、この点については他の2史料も同じである。(10)の記述は「木のみ」<島木>の先端を「かさ木」<笠木>の丈程反らすという内容である。「大工斗墨曲尺之次第」では「鼻先程反る」と記されているが、この意味は不明である。しかしながら(10)の「そりハかさ木ほと」の「か」が「な」と誤写され、即ち「そりハなさ木ほと」となっていたと推定すれば、同書で「鼻先程」と記されたことが理解できる。「孫七覚書」のこの部分の意味は不明であるが、「ワ」を「ソ」の誤写²⁰⁾、「ホト」の「ホ」が脱落したと考えれば(前掲引用文中の下線部分)、(10)と同一内容となる。

(25)の部分は、「小はしら」の柱間の規定に関する記述であるが、どの様に「おし入」(押し入)れるのかについては記されていない。「孫七覚書」では「ハシラノマハリヤウエヲ入ヨ也」とあるが、意味は不明である。「小はしら」の柱間に関して、「新撰拾遺大工規矩尺集」には「小柱乃間の廣サハ大柱乃内法へ小柱乃かさ木をおしこむ也」、「匠明」には「同間ハ鳥居ノ下ノ間柱内ニ押籠ルト云リ」とある。前者では「おしこむ」、後者では「押籠ル」とあり、両者とも「おし入」と同義語が使われていることから類推すると、当史料の「おし入」もこれらと同様の内容であると考えられる。従って当史料においてもこれら同様、「大はしら」の柱間内法から「小はしら」の柱間が決められているものと推定される。

(27)は「小はしら」の貫の高さ(位置)に関する記述であるが、「孫七覚書」にはない「中ぬきのたかさハ大ぬきの下より」という記述があり、これによって「小はしら」の貫の高さを決める際の基準位置が具体的に知られる。しかしながら、貫の高さ(位置)を決める記述はない。

(28)(29)の部分は、「大はしら」と「小はしら」の転びに関する記述である。当史料では「大はしら」が「ハツなかつミほと」(ハツ中墨程)、「小はしら」が「すくとのあいほと」(垂直と大柱の転びの間程)であるが、「孫七覚書」・「大工斗墨曲尺之次第」では大柱がそれぞれ「中スミ」・「柱径の二分の一」、小柱がそれぞれ「スヘトノアイホト」・「すへとの間ほど」となっている。

木割の基準となる柱間に関し、既に「孫七覚書」では「木ノミ」の長さ」が鳥居水平部材の長さを決定する際の重要な基準となっていることが明らかにされている²¹⁾。当史料でも、柱の転びに関して「孫七覚書」とは転び具合が異なるものの、(28)で「はたかる」(開る)と表現していること、(9)で決められる「木のみ」<島木>の長さを基準にして(7)で「木のみ」<島木>鼻からの「かさ木」<笠木>の出を、更に(15)では貫の長さをも定めていることは同じである。従って当史料でも「木のみ」<島木>下端での柱間が基準柱間と考えられる。

以上の検討を基に纏めたのが図5及び図6である。

結

庄内藩の大工棟梁職を代々勤めた小林家旧蔵史料の中から、新たに発見した慶長期以前の木割書に記される鳥居の設計手法について

の報告を行った。

鳥居の木割は3史料に記されているが、それらの中で使われている部材名などの用語、即ち「木のみ」・「しま木」などは、江戸期以降一般的に使われているものとは異なっていた。木割の基準となる柱間は、何れの史料でも江戸期以降一般に採用されている柱脚部のものとはせず、貫の上端又は柱頭部の「木のみ」<島木>下端での柱間としていた。内法高の基準位置、柱の転び、貫の長さの決め方などは各史料で異なる方法が用いられていた。柱の転びについてはいわゆる「ハツ中転び」や「半転び」が、貫の長さの決定法では「五間割り」に相当する技法の存在が確認された。笠木・「木のみ」<島木>の形状は、鳥居において最も重要な要素の一つであるが、それらの端部での丈や反り、柱間内での弛み、柱からの出(長さ)などの決め方も江戸期の木割書には見られない様々な方法が用いられていた。特に笠木の長さの決め方には、いわゆる「禪墨」と呼ばれる方法も見られたが、「木のみ」<島木>端部からの出を規定するという方法も採られていた。

以上のように本報告で取り上げた鳥居の木割には、江戸期以降一般のものとは異なる技法が多く認められた。今後、更にこれら技法の歴史的意味について検討するとともに、小林家旧蔵史料に記される他の建物の木割についても明らかにしていきたい。

註

- 1) 内藤昌「大工技術書について」(建築史研究, 第30号, 昭和36年)。
- 2) 日本學士院編, 昭和36年。
- 3) 「愚子見記」の研究には、内藤昌「愚子見記の研究」(井上書院, 昭和63年)がある。
- 4) 新見貫次, 永井規男「洲本御大工斎藤家旧蔵の木割書について」(日本建築学会近畿支部研究報告集, 昭和56年)。
- 5) 内藤昌, 西村真孝「木割書『孫七覚書』について—その1〜4」(日本建築学会東海支部研究報告, 昭和44年)。
- 6) 内藤昌, 西村真孝「木割書『今福彦兵衛伝来目録』について」(日本建築学会東海支部研究報告, 昭和45年)。
- 7) 岡本真理子, 渡辺勝彦, 内藤昌「古河新兵衛覚書」系本について」(日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和59年)。
- 8) 永井康雄, 飯淵康一「庄内藩大工棟梁小林家旧蔵の慶長期以前の木割書とそれらに見られる斗拱の木割」(日本建築学会技術報告集, 第1号, 1995年)。
- 9) 小林家については、永井康雄, 飯淵康一「庄内藩の普請・作事組織について」(日本建築学会計画系論文集, 第468号, 1995年)参照。
- 10) 前報告の表1は、小林家旧蔵史料の内、慶長期以前の年紀を有する木割書類及びそれらとほぼ同時期のものと推定されるものについて、書名・史料の寸法等・奥書・内容を纏めたものである。
- 11) 現在、「島木」・「台輪」・「額束」と呼ばれている部材は、それぞれ「きのみ」・「わらさ」・「しまき」と呼ばれていたことが註5)論文で明らかにされている。また「紙上墨氣 全」(溝口林卿, 寛政2年(1790)増補)に「額束 本名島木也今笠木ノ下端以て為ス屑ノ島木ト云ノ誤ナリ」, 「島木 今云ノ額束」とあることから、これらの呼称は近世初頭以前では一般的に用いられていた可能性があろう。本報告で取り上げた史料でも現在と異なる名称を用いている場合があるので、それらについては現在一般的に使われている部材名をく内に併記する。
- 12) 「はんかく」は「柱の半分」とする見方もあるかもしれないが、「ひとめんと」であることから、ここでは八角のことと一応解釈しておく。
- 13) 渡辺保弘「初期木割書における鳥居木割について」(日本建築学会関東支部研究報告集, 1989年)では、それまでに知られていた江戸初期以前の木割書に見られる鳥居の基準柱間は柱脚部より上部にあることが指摘されている。
- 14) (9)と(10)の記述については、(9)が「木のみ」<島木>端部で増しが無い場合、(10)は増しが有る場合の割方を示しているとも考えられる。
- 15) (25)の記述中の「うへにて」の「うへ」については、(21)の「大貫の下」という記述に対する「大貫」の上端(即ち基準柱間)の意、或いは控柱の上部での柱間の意が考えられる。後者の場合は控柱の上部と限定するのであるから、控柱にも転びが有ることになるが、それを具体的に示す記述が無いので、試作図では控柱を破線で記すこととする。
- 16) 註5)論文—その2—to項目名が記されている。
- 17) 渡辺保弘「『孫七覚書』との比較による原本『大工斗墨曲尺之次第』鳥居木割の復原考察—Ⅰ. 校註の方法と冒頭部の考察—」(日本建築学会計画系論文報告集, 第366号, 昭和61年)。
- 18) 例えば(19)と(20)の間の記述から写本であることは明らかである。
- 19) 五間割についての論考には、渡辺保忠, 中川武「匠明」花表・貫の五間割について」(日本建築学会大会学術講演梗概集, 昭和46年)がある。
- 20) 渡辺保弘「『孫七覚書』との比較による原本『大工斗墨曲尺之次第』鳥居木割の復原考察—Ⅱ. 中核部前半の考察—」(日本建築学会計画系論文報告集, 第406号, 1989年)の中で、「孫七覚書」中の「ワ」と「ソ」の判別の難しさが指摘されている。
- 21) 註20)論文。

[1996年6月19日原稿受理 1996年9月10日採用決定]